
花の国

蜂子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の国

【Nコード】

N7297V

【作者名】

蜂子

【あらすじ】

花と水の国、フリテイリア。姉が結婚したと聞いたのは近所のおばさんたちからだった。それを聞いた次の日、私の小さな家のドアをノックしたのは。

姉の結婚と薔薇

姉が結婚した。そう聞いたのは、本人の口からでも本人からの手紙でもない。近所のおばさんたちからだった。

王都ネモフィラから少し離れたセントポリアという町に私は住んでいる。私が住む国、フリテイリアは花の国として有名だ。このセントポリアもいたるところに花壇があり、花が植えられ整備されている。

セントポリアは王都も近いことから、王都にはみんなよく出かけるし、また人で賑わう美しい町だ。私はあまり行かないけれど。

私はここで花屋の売り子をして生活している。花屋の売り子は花の国だからかとても高倍率なのだ。フリテイリアには王都に近いほど、多くの花屋がある。売り子を勝ちとるのも戦いだけれど、花屋を営むのも日々、生き残りをかけた戦いだ。

花の国で有名なフリテイリアだけど、豊かで清らかな水の国でも有名だ。セントポリアの女神の湧き水はフリテイリア1000選に選ばれるほどの有名な水汲み場である。

「そうそう、ローズ様の結婚式素敵だったわよね」

「ええ、素敵だったわ」

「え？ローズ様？」

そんな会話が聞こえてきたのは町の水汲み場だった。

私はローズ様、結婚式、まさかと思い聞き返してみた。そうすると案の定、話をしていたおばさんたちから考えどおりの答えが返ってきた。

「あら、メグ。知らないの？この間、王都で王太子様とローズ様のご結婚式が行われたのよ」

そういつて、近所のおばさんたちはつい先日、王都で行われた王太子様とローズ様の結婚式について嬉しそうに衣装がああだったと

か、詳しい話まで教えてくれた。

たぶんそうだったんだと思う。ローズ様が結婚、という言葉にそのうなのかと納得する反面、やはり驚きは隠せなくて私の頭のなかは混乱していた。つまり、おばさんたちの話は半分くらいしか頭のなかに入ってこなかったからよく覚えていないのだ。

最近もつとも幸せな結婚式を挙げたローズ様ことローズ・M・クラインは、花の様な容姿に、鈴の様な声を持ち、器量良しと言われる、私の血の繋がった姉である。

姉だつてことは嬉しそうに話してくれたおばさんたちも知らないし、誰にも言つたことはない。

姉の結婚式を町の噂で聞いたように、私は一年ほど姉と連絡さえ取っていない。けして不仲だからというわけではない。どちらかというと、仲はいいほうだつたと思う。ローズ様の妹の私が一人小さな家で暮らして、姉とも連絡を取らない。それにはもちろん理由がある。

といつても、姉が結婚したとしても私の生活は変わりはしなかった。それは喜ばしいことなんだろうけど、連絡すらとっていないかつたし、気になりはするけど何か特別な行動をするつもりもなかった。朝起きたら、水汲みをしなくちゃいけないし、朝ごはんを食べたら仕事をしなくちゃいけない。仕事が終わつたら、時間をみて買い物にも行かなきゃいけない。買い物が終わつたら、夕ごはんの準備ひとり暮らしの私の一日は忙しい。

私としても、一年も連絡をとつてなかったのにこの状況で連絡をとるなんて浅ましいと思うから連絡なんてしたくない。それに、仕事だつて上手くいつてるし、ここまでひとりやってきたのだからそれに、素直に喜べない私もいた。

まあ、連絡を取るにしてもこんな小さな家に住む一介の娘の私の手紙なんて、未来の王妃の彼女に届くはずがないのだ。

特別なことをしないといても、姉の結婚式の話聞いた後は姉とまだ一緒にいたころを思い出すことが多くなった。思い出すと一年前の私はすごく夢見がちで純粹で、馬鹿だったと思う。

最初の半年は夢だと思った。最後の半年に、私は現実を理解し始めた。そして現在、私は現実を知っている。

楽しくない思い出というわけではないけれど、自分がまだ青かったころを思い出すと気分はあまり良くない。

仕事も進まない。

これもすべてあいつのせいだ。

そう思いながら薔薇の花の棘をとる。

「いった！」

なんの呪いなのか、勢いよく指に棘を刺した。

ぼつりと落ちた血は鮮やかにバケツの中の水に溶けた。

その後も何回か刺してしまった。それに見兼ねたのが、店長が休憩の合図を出してきた。

「マーガレット、指が絆創膏だらけになる前に休憩入っていいわよ」

「はい、すみません」

さすがにこれだけではクビにならないだろうけど、いつもは出来ていることだから少し凹んでしまう。

お昼ごはんのサンドウィッチを食べながら、フリテイリアに来たころを思い出していた。

私こと、マーガレット通称メグはフリテイリア出身ではない。

十六歳のときに三歳違いの姉とフリテイリアの地にたどり着いた。いや、むしろ迷い込んだ。

今はマーガレットと呼ばれているけど、本当はマーガレットという名前じゃない。お姉ちゃんも本当はローズっていう名前じゃない。そう。それはフリテイリアで初めて名前を聞かれたとき、あいつが勘違いしたときから私はマーガレットになった。

あいつと会ったのは庭園だった。ロマンチックな雰囲気っぽく感

じるだろうけど、実際私にとってはロマンチックでもなんでもなかったと今では思う。そう、私にとっては。

家のリビングで足元が光ったと思ったら、目の前は花だらけだった。隣には姉がいて、思わず手を握ってしまった気がする。ふと、視線を感じて見てみると、紫色の瞳を見開いたあいつがいた。

最初は困惑したあいつと私たちだったけど、フリテイリアがあるこの世界では、異世界からの迷い人はときどきいるらしく、状況を把握したあいつはすぐに落ち着きを取り戻した。まだ状況がつかめなかった私たちは落ち着けやしなかったけど。

『名は？』

たしか、こう聞かれたと思う。落ち着きはしたが、警戒はまだしていたあいつはかなりぶっきらぼうだった。

『めぐ・・・です』

増田めぐ、それが私の本当の名前だった。でも、あいつはなぜか愛称と勘違いした。

『マーガレットか』

『え？いえ、メグです』

『メグはマーガレットの愛称だろう』

そうしたら、増田マーガレットじゃないか！違うから！そんな叫びもあいつには聞こえていなかった。

あいつはすでに姉に意識が向いていたんだから。

『貴女は？』

『姉のそらびです』

『そらび？珍しい名前だな』

『えっと、ああ、あれです。私たちのところではこの花をそらびとも呼んでいて・・・』

姉はきよろきよろと周りの花壇を見渡して、薔薇を指差した。

『ああ、ローズか！良い名前だな』

笑いあう二人、その時すでに私は蚊帳の外だった。

良い雰囲気ってこういうことを言うんだろう。

それからあいつは姉をローズと呼び、私はメグ、マーガレットと呼ばれるようになった。最初はマーガレットと呼ばれるのは本当に嫌だったけど、今では慣れた。姉は彼らが呼びやすいんだから良いんじゃないかしらと言って気にしていなかった。

そんなこんなで、あいつの加護の元、新しい生活を始めた私たちだったけど、一年前に私はその加護の元から抜けた。フリテライアに来て、一年たったときだった。異世界に来て二年経ち、十八歳になった今もこの行動は後悔はしていない。これがあつたからこそ、今の私がいるようなものだから。

私は弱かった。気付かなかった。子供だったんだ。早く気付けばこんな気持ちなんか引きずらなくてすんだのに。

「馬鹿みたい、なんで思い出しちゃったんだろ」

サンドイツチはすでに無くなってしまっていた。もう仕事に戻らなくちゃいけない。

あいつのことなんて思い出したくも無かった。アスター・クォーツ・フリテライア。このフリテライアの第一王子、つまりは未来の王様。姉の夫になった奴のことなんて。

思い出したくも無かったのに

ちくり、ちくり。薔薇の棘が私の心に刺さって抜けない。

ワンピースとノック

姉の結婚の話を聞いた次の日のことだった。

火の日は売り子をしている花屋が定休日なので、私も休みだ。そんな私はいつもあまりしないけれど、解れてしまったワンピースやスカートを直していた。

紺色の少し古い型のワンピースを手取る。懐かしいそのワンピースは私がセントポリアに着いた時に唯一持っていた洋服だった。あのころは、あの場所から逃れたくて仕方が無かった。

このワンピースと元の世界で持っていたもの、といっても携帯電話くらいだけど。それらを持ってセントポリアにたどり着き、運良く花屋の売り子になれた。これは一番の幸運だった。

でも、無謀なことをしたと少し反省はしている。

もうクタクタになってしまったワンピースを見るとこの一年は結構大変なものだったなと思いつく。

売り子として雇ってもらえたけど、住むところもなかったし持ち物も全然無くて、店長や近所のおばさんたちにはとてもお世話になった。

花の名前だつて一から覚えなくちゃいけなかったし、仕事も思ったよりも重労働だった。

今では、花の名前も覚えたり、アドバイスだつてできるようになった。それに、ちよつとしたブーケだつて作れる様になった。

このワンピースはアスターから貰ったものじゃない。アスターが私に与えてくれたものは、お屋敷に全部置いてきた。ドレスも髪飾りも全部。

(だって、本当は私のものじゃないもの)

それはアスターのお金で、お屋敷で生活するためにアスターが与えてくれたもので。お屋敷から出るっていうのに、持っていくなんで泥棒と同じだ。だから、このワンピースはお屋敷のメイドのお古

のワンピースと私が元の世界で来ていた洋服とを物々交換したものだ。

この世界での女性はスカートが主流なので、パンツスタイルの女性は全然いない。だから、ジーンズで屋敷を出るわけにはいかなかった。

生活に少しずつ余裕が出てからはあまりこのワンピースも着なくなったけど、なぜか捨てる気にはなれなかった。

アスターはお城の外にお屋敷を持っていた。ネモフィラの郊外とどうか、お城が少し遠くに見えていたから、中心街からは離れていたと思う。

私たちはそこでお世話になっていた。

アスターはお城に住んでいたから毎日一緒というわけではなかったけど、よく様子を見に来てくれていた。今更だけど、あんなに頻繁に来て公務は大丈夫だったんだろうかと思う。

私たちが会ったのはそのお屋敷で、お城ではなかったためか私はアスターの父親でもある王様や王妃様には会ったことはない。本来は異世界から来たということと、アスターにお世話になっていることから会うべきだったんだろうけど、アスターが会わせなかったんだから理由はわからない。

姉と私はそこで貴族が受けるような教養を受けさせてもらっていた。習慣なども教わったから、セントポリアでも不信がられることなく過ごしている。

あと、花と同じ名前をつけるのがこの国では流行っているらしく、マーガレットという名前も街に溶け込むひとつになった。かなり不本意だけど。

アスターの家族といえば、数回だけだけど弟のヘレニウム様には会ったことがある。あまりアスターとは似ていなかったけど、オレソングがかった金髪が印象的だった。

アスターはプラチナブロンドだった。光に当たるとキラキラ光る

し、きれいだった。

そういえば、姉がいなくなったあのお屋敷はどうなっているのだろう。王太子妃になった姉はお城に移り住んだだろうし、もう住んでいる人はいないのだろうか。お屋敷にいた人たちはこんな私でも優しくしてくれた。私は逃げてしまったけど。

『メグ』

アスターの私を呼ぶ声が聞こえた気がした。

少し感慨深くなってしまった頭を振って、考えるのをやめた。

(私にはもう関係ないわ)

黙々と針を通してしていると、ドアがノックする音が聞こえた。

(誰だろ・・・)

家に訪問者が来るのは少なくない。近所のおばさんがお裾分けに来てくれたり、セントポリーアで仲良くなった女の子たちが来たり。針と糸切バサミを裁縫箱に仕舞ってからドアに向かう。私がゆっくりなのはいつもと同じどおりなのに、ノックの主はイラつき始めてノックの仕方が粗暴になってきた。

コンコンコンと控えめだったのが今はドンドンとドアを叩く音になりかけてる。

「はい、はい、はい」

急かさないでよと愚痴をこぼしながら、ドアを開ける。いつもは近所のおばさんも女の子たちもこれくらいだったら怒ったりしないのに。

ドアを開けて最初に目に入ったのは、太陽にあたって輝くプラチナブロンドだった。

私はこの髪を持ち主を知っている。

「あ・・・」

アスター。

目の前にいるのは私が逃げた人だった。

「メグ、探した」

一年ぶりに聞くアスターの声は記憶に残っていた声と変らなかつた。

呆けている私の髪をアスターの指が触れる。

「メグ」

呼ばれた名前に、はっとしてアスターを突き飛ばしてしまった。

「帰ってください。私貴方のことなんて知りません」

半分条件反射でそう言って、ドアを閉める。

（なんで、今更。どうしてバレたの）

「おい、メグ！」

アスターが足をドアに挟んできた。だけど、私はかまわずドアを思いつきり閉める。アスターの足が引つ込まないので、ドアが閉まらない。

思わず脛を蹴ったらさすがのアスターも足を引つ込めた。欠かさず、鍵を閉めた。

痛かっただろうと少しだけ申し訳なくなったけど、アスターが強引だから悪いんだ。

「メグ、開けてくれないか」

「帰って」

アスターがドアを叩きながら懇願する。

でも、私はドアを開ける事は出来ない。ぐるぐると考えがめぐって、頭が混乱する。

結婚報告か、それとも連れ戻しに来たのか。でも、結婚報告で終わるわけが無い、私はお屋敷から勝手に出て、姉は王太子妃になつたんだから。

私が無言でいると、ドアの叩く音が静かになっていった。

「また来る」

ドア越しにため息が聞こえて、足跡が遠ざかる。

アスターは帰ってしまったのだろうか。鍵を開けて、少しドアを開けて外を見る。

（アスターいない）

「アスター・・・」

アスターは姉のところに戻った。

清々するはずなのに、どうしてこんなにも苦しんだろう。

再会と流行

また来る、とアスターは言った。

その言葉通り、アスターは私の家に再び訪れた。ちょうど、花屋に出勤しようドアを開けた瞬間にアスターのプラチナプロンドが目に入ったから、これがデジャブかと思ってしまった。

そんな私は追いつ返すべく、ドアの前で応戦している。

「もう来ないでって言ったはずです」

「帰れとは言われたが、もう来るなどは言われてない」

少しイライラしたようなぶっきらぼうな口調も変っていない。いつもそうだった。姉にはもっと穏やかに話すのに、私と話すときは口調が少し厳しくなる。

十分くらいこのやり取りとにらみ合いをしている。

しかし、このまま居座られると困る。だって、相手は自国の王子様で、しかも姉の結婚相手で、未来の王様なのだから。

王家と関わりがあるだなんて知られたらここにいられなくなるかもしれない。

そうこうしているうちにぽつぽつと家の前に人が立ち止まってきた。近所の人たちも少しいる。

これ以上は見られると後が面倒なので、早く帰ってもらわなきゃいけない。

それに、仕事がある。遅刻するわけにはいかない。

相手の要求を聞いて、それを呑めばいいんだろうけど聞いたら負けない気がする。

「メグ、帰るぞ。ローズも待っている」

アスターが私の腕を取る。

分かっていた。アスターが私を探しているのは姉のためだったことくらい。

アスターと姉がいるところへなんか戻りたくない。幸せそうな二

人を見たくない。

(嫌よ)

私の頭に浮かんだ言葉。

この世界での私の家はここだ。

「私の家はここよ」

腕を振りほどきながら言う。

もう、王子様だとか野次馬なんか気にしていられなかった。

「マーガレット!」

アスターが咎めるようにマーガレットと呼んだ。

「マーガレットじゃないわ!私、仕事に行かなきゃいけないの。どいて」

そう言って走り出した。

アスターの呼び止める声が聞こえたけど、足は止まらなかった。
止めなかった。

その後、数日経ってもアスターが訪れることはなかった。

強制的に連れ戻されなかっただけ良かったんだろう。

姉には元気になっていると伝えるだけに欲しい。

町の人たちの追及も「知り合いに似てたらしいの」と言えばもう
追求はされなかった。

やっと平穩が訪れた私は今日も仕事に勤しむことにした。

「すみません、花をくれませんか」

店の奥で作業していると、男性の声が聞こえて店先に出る。

「はい。どれになさいますか?」

笑顔で対応しながら、頭の片隅でおおと感嘆する。

「どれがいいかな。おすすめはありますか?」

はにかみながら言う彼は一般的な茶色の髪に瞳。それに男性が花
を買いに来ること事態ないわけではない。私を感動させているのは
青年の服装だ。巡回騎士の制服を着ている。

巡回騎士とは名前の通り、町を巡回して町の安全を守る騎士のことだ。日本で言うとおまわりさんのようなもの。

巡回騎士は男女ともに人気がある。騎士というものはみんな憧れるものだし、騎士になるというのは王国で認められた名誉のあることなのだ。まあ、でもはつきり言って巡回騎士はすごく高給取りというわけではない。それは王宮勤めの騎士とかに比べたらで、一般よりも給料は良い。

そしてなんと言っても、制服がかっこいい。灰色を基調とした制服は襟や袖に黒いラインが入っていて、胸には王国のエンブレムが飾られている。そして、黒いブーツ。

コレと言って好みの騎士はいないが、制服を着こなす彼らは目立つし女の子の憧れの的で目の保養だ。

「そうですね・・・プレゼントですか？」

「ええ、彼女の」

そう言って嬉しそうに話す彼の笑顔を見てつついっ私も笑顔になる。

「その方のイメージは？」

「こつふわつてしててかわいいつていうか・・・」

話を聞いているうちに隣の店先あたりに女の子が数人集まって、きゃあきゃあ話している。

「巡回騎士だわ」

「素敵よね！あー、私も花束プレゼントされたいわ」

「だめよー、たしか彼はリリィの恋人よ」

えー残念と女の子達が言う。脈が無いとわかると女の子たちはいなくなつていった。

立っているだけで女の子たちが集まるのだ。やっぱり巡回騎士って目立つ。

「リリィっていうんだけど」

のろけた顔で巡回騎士の青年が言う。

リイというところの水汲み場近くに住んでいる彼女だろうか。たしかにふわつとして可愛らしい。そういえば、巡回騎士の恋人がいると言っていた。そして結婚も考えていると。

「では、お名前と同じ花はどうですか？今、記念日やプロポーズに贈る方が花と同じお名前だったとき同じ名前の花束を贈るのが流行っているんです。花と同じお名前じゃなかったときはローズ様にあやかって薔薇の花束なんですけど、どうですか？」

そういいながら、百合の花を勧める。

彼に話したとおり、記念日やプロポーズに彼女と同じ名前の花を贈るのが流行っている。しかし、名前が花の名前じゃない人もいる。そのときは薔薇の花束なのだ。

噂では王太子様がローズ様にプロポーズしたときに名前と同じ薔薇の花束を渡したとか何とか。

(アスターのくせに・・・)

なんだかんだいって、彼らは私の中からいなくなってくれないのだ。まだ新婚だから周りからの噂が絶えない。わたし自身から話題を振らなくても話す近所のおばさん。そして女の子達。

自分で話を切り出して思い出しておきながら、少し気分が悪くなつた。

でも、そんな気持ちも目の前の彼の言葉により、心の奥へ隠れた。

「じゃあ、そうしようかな。百合をお願いするよ」

「かしこまりました」

リイに気に入ってもらえるように可愛い花束をつくってやろう。そう思いながら、私は腕まくりをして百合の花を手を取った。

再会と流行（後書き）

その後、彼はリリィちゃんにプロポーズしてOKもらいました。

巡回騎士と制服

「メグ、今日のお昼はティーナベーカーリーのスペシャルサンドにしない？」

そう店長に言われて、二つ返事で飛び出した花屋。今はその帰りだ。

ティーナベーカーリーはこの界限では美味しいと評判のパン屋で、スペシャルサンドは一番人気のサンドである。だけど、このスペシャルサンドはティーナベーカーリーのパンたちの中でもいいお値段のランキング上位なのだ。

私くらいのお給料だとそんなに頻繁に食べれないのが実際のところ。でも、今日は店長がお金を出してくれたので食べれるってわけ。

パン屋から花屋までの道のりをスペシャルサンドを抱えながら鼻歌交じりで歩く。

もうすぐ自分が売り子をしている花屋というところで、近くに女の子たちが数人、遠巻きに集まっているのが見えた。

「どうしたんだろっ」

そう思い、近づいてみると店から巡回騎士と店長が出てきた。

女の子たちが色めき立つ。

(巡回騎士ね・・・目立つものね)

出てきた巡回騎士のプラチナブロンドが風で揺れる。どこかで見たことがあるプラチナブロンドだ。

あれはと近づいてみると、背を向けていた巡回騎士がこちらのほうを振り向いた。

「ア・・・アスター!？」

それはアスターだった。いつもの貴族の服や宮廷の騎士の制服じゃない。

ここ一年で見慣れた巡回騎士の制服を着ているが、あれは絶対に

アスターだ。

私はその名前を呼んですぐにはつとなつて口を紡ぐ。けれど、二人は私の声をちゃんと耳で拾っていた。

「メグ！」

店長とアスターの声が重なる。

あらあらあらと言いながら店長が私の手をとった。

「メグ、この方メグを探してたんですって」

店長が笑顔でこれがうちのマーガレットですなんて言っている。

私といたら、アスターの顔と巡回騎士の制服を交互に見上げて、口を開けっぱなしの状態だ。

「ちよつと、あの子の知り合いなの？」

女の子たちが不満げに話している。

その声に少々飛んでいた意識が戻ってくる。

視線が痛い。ここから逃げ出したい。

「ご、ごめんなさい！店長、もう少し休憩いただきます！」

そう言つて、スペシャルサンドを店長に押し付けて、代わりにアスターの手をとつて走り出した。

若いわねーという店長のつぶやきを聞き流しながら。

少し走つて、人通りのない裏道に入る。

息を整えないまま、振り向きざまに叫んだ。

「その制服どうしたの！」

本当に色気のない切り出しだ。しかしそんなことも言つてられない。

あんな、この町には浮くようなすごく仕立ての良い服を着てきたかと思えば、次は巡回騎士の制服だなんて！目立つに決まっている。むしろ、すでに目立っていた。

似合う似合わないの問題じゃない。いや、似合ってるんだけど！アスターの顔を見やる。たぶん私の顔は今、般若のような顔だろう。

「変装しないと城から出れなかったんだよ」

アスターが少し困った顔をしながら言った。

「なら、無理にお城から出なくても良いじゃないの」

無理をしてまで私を連れ戻す価値なんかない。

「ただ、変装してまで私に会いに来てくれたと思うと心が嬉しそうに鼓動する。」

(だめよ、めぐ)

「無理してまで来る必要はないのよ」

だって、私はここから離れる気はないし、姉とアスターのところへ戻る気もないのだから。

しかし、その言葉になぜかアスターはむっとしたようで一瞬、いつもより眉間にしわが寄った。

「無理してなんかない」

まだ握ったままだった手がアスターの強い力で握り返される。

アスターの紫色の瞳が私を見つめる。数秒もしないうちに私は目を逸らした。

いつからだっただろう、アスターの瞳を見れなくなったのは。姉とアスターの隣にいるのが辛くなったのはいつからだろうか。

「と、とにかく目立つ格好では来ないで。巡回騎士もいつもの服もダメよ」

言い訳がましいかもしれないけど本当なのだから仕方がない。

それに今はアスターの瞳から逃げ出したかった。

「目立つのか？」

なぜだと言わんばかりにアスターが聞いてきた。

「だって、巡回騎士は女の子に人気だから目立つちゃうし、いつもの服もすごく仕立がいいから悪目立ちしちゃうのよ。駄目よ、嫌だわ……」

訳を言ううちに顔が火照ってきた。恥ずかしい。とっさに片手で口を押さえる。

なんで駄目なんだろう、なんで嫌なんだろう。どうして口に出し

てしまったんだろう。

自分で墓穴を掘っている気になってきた。でも、これならアスターももう来ないだろう。庶民の服まで着て来る必要はないんだもの。

「そうか・・・」

アスターが悩んだ顔をしてつぶやいた。

なのに手は握り返されたまま。握り返された手が熱い。手を引いてもアスターの手は離してくれない。

「とにかくね！次、そんな服で来たら絶対に会わないからね！」

思いつきり腕を振って、手を振りほどく。

少し強引だったけど、頭が混乱してそれしか思いつかなかった。

「ぜ、絶対によ！？」

捨て台詞のように言って、私は花屋まで逃走した。

握っていた手がまだ熱い。

アスターと服（前書き）

短くてごめんなさい・・・！

アスターと服

私がそんな目立つ服で来ないでよ、そうだった次の日のこと。

もう来ないと思っていたアスターが今度はセントポリアの若者と同じような服装で花屋にやってきた。

私は驚きのあまりにブーケで使うガーベラの茎をハサミで思いっきり短く切ってしまった。むしろ茎すらない。

にやけた店長がなにを気を利かせたのか今日はもう仕事はないと追い出されてしまった。

肩を並べて歩く。家に帰るわけにも行かず、セントポリアの中心に位置する広場に行くことにした。アスターは何も言わずに隣を歩く。言葉はなかった。

私はアスターの格好を横目で見た。

普通にシャツにベスト、チエツクのズボンという格好なのに、アスターの元々の雰囲気からなのかあまりにも似合わない格好について笑ってしまう。

無言を崩したのは私だった。

アスターにも似合わない格好なんてあるんだ。

煌びやかな洋服を着たアスターしか見たことはなかったから違和感を感じるのかもしれない。

そうするとアスターは拗ねたように言った。

「お前がいつもの服もこの町の巡回騎士の服も嫌だというから！」

「だって、こんなに似合わないとは思わなくて。ふふっ似合わないね、アスター」

「はつきりと言うな！ やつと、笑ったと思ったら……」

アスターがぶつぶつと文句を言う。

最後の言葉は小さくて聞き取れなかった。

だけどそんなアスターの不満気な顔にも笑みが零れた。

広場には人が沢山いた。といつてもピークは過ぎているから広場で屋台を出している人や、それに並ぶ人。あとは噴水の周りで遊ぶ子供たち。雑談をする人。

噴水の淵に座る。

私が思っていたよりもアスターは広場の雰囲気には溶け込んでいたようだ。

たわいない話が流れる。穏やかな空気だ。花屋にはどんな客が来るのかや、街のこと。

だけど、アスターや姉のことや結婚のこと、屋敷のことについては話が出ない。話に出したらこの空気がなくなってしまうようで怖くなる。

まだ出さないで。まだ私は貴方といたい。

たとえ貴方が姉のために私に会いに来ているのだとしても、服を変えてまで会いに来てくれるアスターに嬉しくなってしまう。

そう思ってしまう私はわがままで。

そんなことを思っていると話が止まった。

アスターは私を見たまま喋ろうとしない。

ふいに掴まれた手に肩を震わせた。

アスターの手は大きくて、ぎゅと重ねた私の手を握る。

アスターが声を発するために口を開いた。

耳を塞ごうにも手を握られているから塞げない。

「メグ」

アスターが私の名前を呼んだ。

お願い、聞きたくない。

私は咄嗟に強く目を瞑った。

アスターと服（後書き）

お話はできてるのに書けないこのジレンマ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7297v/>

花の国

2011年12月12日00時49分発行